

受付カウンターのの上にある電光掲示板へ、赤い文字が流れていた。

『クリとおまんこの感度チェックの結果が確定するまで、施設外への退出はできません』

何度読んでも文面は変わらない。すべての成人女性が年に一度受けることを義務づけられた、クリとおまんこの定期的な感度チェック。私のもとへ初めての検査通知が届いたのは、一か月前だった。

案内に載っていたのは日時と持ち物、それから検査結果が出るまで帰れないという注意だけだ。何を、どのように調べるのかは書かれていない。私は提出書類を前日までに揃え、指定時刻の十五分前には感度チェックセンターへ着いた。それでも受付番号を呼ばれる気配がするたび、膝の上で重ねた書類の角を指で揃えてしまう。

「佐藤真央です。今日はよろしくお願いします」

「はい、お待ちしていました。こちらへどうぞ」

記入票と検査通知書を提出し、退出制限中と印字された受付カードを受け取った。待合椅子へ腰を下ろす。『検査完了』の表示へ変わるまでは、入口のゲートも開かないらしい。

（帰れないって書いてあったけど、怖いことをされるわけじゃないよね）

自分へ言い聞かせても、呼び出し音が鳴った途端に肩が跳ねた。案内されたのは個室が並ぶ廊下の一番奥だった。白い検査室には二人の男性がいる。一人は腕まくりをした検査主任で、こちらを見るなり椅子から勢いよく立ち上がった。もう一人は端末を手に壁へ寄りかかり、面倒そうな顔で画面を眺めている。

「佐藤真央さん。初回だな。よし、時間どおりだ」

先に口を開いた男の声は大きく、妙に張りがあった。

「はい」

「俺が主任の山本圭介。数値が出るところまで一気に進める。長引かせる方がつらいからな」

「補佐の小林直樹です。主任が測定を進め、俺が数値の記録と判定を担当します。……主任、一気にやるとか余計なこと言うから、もう顔に出てますよ」

「あ……」

小林さんに視線を向けられただけで、私の顔が熱くなった。何も答えていないのに、緊張していることまで見抜かれている。山本さんは気づかず、

説明用のパネルを勢いよくこちらへ向けた。

「測るのは全部で五項目だ。反応値が揃えば検査終了、退出許可が出る。数値が上限に達した場合は、測定範囲を広げたり追加測定へ切り替えたりするが、そのときは改めて説明する」

「今は、五項目すべての結果が確定するまで退出できないとだけ覚えておけば十分です」

「わかりました」

（五つもあるんだ。何をされるのかは、その都度説明してくれるらしいけど……）

「背筋を伸ばしても数値はよくなりませんよ。むしろ力が入るので面倒です」

小林さんは端末から目も上げずに言った。そっけないのに、私の姿勢ま

できちんと見ていたらしい。

「よし、着替えてくれ。最初の数値から取るぞ」

衝立の後ろで検査着に着替える。前開きの薄い生地。下は紙のような素材だった。

「失礼します」

「どうぞ、こちらへ」

検査台に案内された。足を所定の位置に載せると、自然に膝が外側へ開く格好になった。顔が熱い。

「佐藤、肩まで固まってるぞ。力を抜け。最初から数値を振り切らせる気

か？」

「す、すみません」

「謝るな。息を吸って、吐け。よし、その調子だ」

言われた通りにした。少しだけ肩が下がった。山本さんが手袋をはめ、小林さんも新しい手袋を取り出した。

「よし、始めるぞ。最初は基礎感度だ。声が出ても止めないからな」

「わかりました」

（きちんと指示を聞いて、動かないようにしよう）

指が触れた。検査着の裾が持ち上げられ、専用の下着が慎重にずらされる。空気が肌に当たって、思わず息をのんだ。

（見られてる……ッ♡）

山本さんの指が、そっと外側に触れた。人差し指の腹を使って、割れ目の外縁を上からゆっくりと押さえる。力はいれない。ただ形を確かめるように丁寧に触れていく。

「んっ♡」

（声、出ちゃった……♡）

「外縁の確認が取れました。少し指を入れます」

「はいッ♡」

指が一本、ゆっくりと入ってきた。入り口の輪郭をなぞるように、くりと内壁の縁を確かめる。深くは入らない。ただそこだけをじっくりと何度もなぞられた。

「んっ……♡あ……ッ♡」

ぐちゅ♡

「もう少し奥を確認します」

指が二本になって、内壁をなぞるように奥へ向かう。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡にゆる♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡にゆる♡

「あっ……♡んう……ッ♡」

（指が増えただけなのに、声まで押し出される。動かないようにするだけで精いっぱい♡）

「声は我慢しないでください。記録がずれるので」

「……はい♡」

「反応が早いな。よし、面白くなってきた」

山本さんがそう言った。記録を読み上げるような口調だった。小林さんが手元の端末へ何か打ち込んでいる。

「……ここを押しますよ」

山本さんの指先が、膣壁の少し奥にある上側のあたりを軽く押した。

「んあッ……♡そこ、は……ッ♡」

（そこ……。そこだけ、触れられた瞬間に奥からぞくつとする♡）

「反応しましたね」

山本さんの声が、ほんのわずかに低くなった。端末へ向いていた目が、

私の顔へ戻ってくる。

「ここだな。数値がどこまで上がるか、続けるぞ」

そこを指の腹で押し上げるように、ゆっくりと擦られる。急がず、規則的に刺激を繰り返された。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡にゆる♡

「んあ……ッ♡そこは……ッ♡強くしないでください……ッ♡そこだけ、触られ方が違って……ッ♡」

「感じ方は全部言え。遠慮されると勝負にならない」

「……わかりました……ッ♡でも……ッ♡こんなことまで、口にするんですか……ッ♡」

小林さんが横から口を挟んだ。

「我慢されると記録が面倒です。感じたなら、そのまま答えてください」
（隠すほうが検査の邪魔になるんだ。恥ずかしくても、感じたことを答えなければならぬ♡）

ぐちゅ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「内部は取れた。小林、次はクリの数値だ。手を貸せ」
「了解です」

小林さんが台の横に移動した。二人が両側に立つ格好になる。

（今度は二人で……。中を触られたまま、外まで見られるんだ♡）

「クリトリスの感度確認も基礎感度の測定に含まれます。佐藤さん、力を抜いてください」

「は……はい……ッ♡わかりました……ッ♡」

山本さんの指が内部に収まったまま、小林さんの手が伸びてきた。

「まず包皮。……佐藤さん、息が止まっています。倒れられると面倒なので呼吸してください」

「え……ッ♡」

「吸って、吐く。それくらいは自分でやってください」

小林さんの声が近かった。倒れられると面倒だと言いながら、私の呼吸が整うまできっちり数えている。小林さんの指先が、クリトリスのある部分をそっと上から押さえる。手袋越しの指が直接触れただけで、息が詰

まった。

「ひゃっ……♡ん、あ……ッ♡」

「もう反応してます。次、包皮を剥きます」

「え……ッ♡あ……ッ♡そういう……確認が……ッ♡」

小林さんの指が包皮をそっと押し上げた。覆われていた部分が露出した瞬間、空気が直接当たって体が跳ねた。

「あっ……ッ♡ひゃ……ッ♡♡」

（剥かれた……ッ♡直接、空気が当たるだけで震えてしまう……ッ♡♡）

「これだけで声が出るなら、先は長そうですね」

小林さんが言った。分析ではなく、感心するような声だった。

「先へ進みます。……指で触れますよ。動かないでください」

小林さんはそっけなく告げ、端末へ反応時刻を打ち込んだ。そのまま剥けたばかりの粘膜へ指先を触れさせる。一点だけ軽く触れて、離れる。また触れて、再び離れる。

「んあ……ッ♡んっ……ッ♡あ……ッ♡触れては離れて……ッ♡次に触られるのを待ってしまいます……ッ♡♡」

「主任、内部も動かしてください。連動値を取ります」
「よし、任せろ」

山本さんの指が内部でゆっくりと動き始めた。さっき見つけた弱い一点を繰り返し押す。それと同時に、小林さんがクリトリスを一回転がした。

ぐっ♡ぐっ♡くりっ♡

「ああッ……♡♡んうッ……♡♡やっ……♡♡いっぺんに……ッ♡中と外が……ッ♡♡」

「連動してますね」

山本さんが言った。いつもと変わらない言い方だったが、少しだけ間があった。

「内部刺激がクリに出てる」

小林さんが続けた。端末へ触れていた指を止め、わずかに口元を緩める。

「は、はい……ッ♡どっちも……気持ちいいです……ッ♡恥ずかしいです……ッ♡」

「これが確認作業ですから。……転がすように触りますね」

そう言った小林さんの指が、クリトリスの上でゆっくりと円を描き始めた。

くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡くりくり♡
小さな粒を、丁寧にゆっくりと転がされる。

「んうッ♡♡あっ♡♡ひゃあッ♡♡ゆっくり、そこばかりッ♡♡やっ♡ま
たッ♡♡」

（やだ……ッ♡ゆっくりなのに、逃げられない……ッ♡）

ぐちゅっ♡くりくり♡ぐちゅっ♡くりくり♡ぐちゅっ♡くりくり♡ぐ
ちゅっ♡くりくり♡

「ん……ッ♡♡二人がかりは……ッ♡だめです……ッ♡どっちも、気持ちよ
くて……ッ♡♡」

「同時の方が数値を取りやすいので。……佐藤さん、我慢してるのが顔に出すぎです」

小林さんがそう言った。責めるのではなく、ただ見ている目だった。それが余計に恥ずかしかった。

くりくり♡くりくり♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「あう……ッ♡♡んう……ッ♡♡ひゃっ……ッ♡♡もう、返事が……ッ♡♡」

「……少し強くしますね」

小林さんがクリトリスを少し強く押しつけながら転がした。

ぎゅっ♡くりくり♡ぎゅっ♡くりくり♡ぎゅっ♡くりくり♡

「んッ……ッ♡♡あ……ッ♡♡そこは……ッ♡強くされると……ッ♡うま
く話せなくて……ッ♡♡」

（声、止まらない……ッ♡もう、だめ……ッ♡）

ぎゅっ♡くりくり♡ぐっ♡ぐっ♡

「んう……ッ♡♡ああ……ッ♡♡♡ひゃ……ッ♡♡♡あっ、あ……ッ♡♡
♡」

腰が浮いて落ち着かなかった。逃げようとしても、小林さんが腰をそっ
と押さえた。

「逃げないでください。確認中です」

山本さんがわずかに間を置いた。

「……そこまで感じるとは思わなかった」

山本さんは次の指示を口にするまで、一度だけ浅く息を吐いた。

「小林、クリを指で挟んでみてください」

「了解」

「え……ッ♡挟む……んですか……ッ♡そこまで確かめるんですね……ッ♡」

小林さんの指がクリトリスを二本の指でそっと挟んだ。

ぎゅ♡ぎゅ♡

「ああッ……ッ♡♡♡ひゃっ……ッ♡♡んう……ッ♡♡♡」

（挟まれてる……ッ♡やだ……声が……でも……検査……ッ♡）

「……挟んだ状態で上下に転がしてください」

「はい」

ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡

「んう……ッ♡♡♡ああ……ッ♡♡♡ひゃ、ひゃあ……ッ♡♡♡もう、声
が……ッ♡♡♡」

「締め付けが出てきました。主任、内部をもう少し強く」

「よし、ここだな」

ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡ぐっ♡♡